

早稲田大学博士論文(概要)		
2011	学位記	文科省報告
	5983	乙 2357

博士学位請求論文 「長谷寺銅板法華説相図の研究」 概要書

片岡 直樹

緒言

古くから奈良・長谷寺に伝わり、現在は奈良国立博物館に寄託管理されている国宝「銅板法華説相図（千仏多宝仏塔）」は、縦 83.3cm、横 75.0cm の銅板で、その表面に『法華経』見宝塔品に基づく三層の多宝塔を鑄出し、塔の周囲に多数の仏菩薩像を配し、下部中央に 27 行、273 字からなる銘文を刻んだものである。

本銅板の特徴は美術作品である彫刻と文字史料である銘文の両者をあわせもつことであり、そのことは本銅板が美術史研究においてはもちろん日本古代史研究においても重要な作品であることを意味している。じっさい銅板の研究史をみわたすと美術史研究者のみならず複数の古代史研究者による論考が数多く発表されており、さらにその刻銘については書道史・金石学の専門家からの発言もあって、本銅板が多分野の研究者の関心を集める、いわば焦点の作品であることに気づかされる。

銅板研究の歴史は、主としてその制作年代の解明を目的とするものであった。銘文中には「降婁年（戊年）の 7 月に僧道明が飛鳥清御原大宮治天下天皇の奉為に敬造した」と、一応の紀年と天皇の名が刻まれているのであるが、干支の干にあたる記載はなく、また「飛鳥清御原大宮治天下天皇」の語も天武天皇と持統天皇のどちらをも指しうることから、制作年の特定が難しく、そのことが大きな争点となってきたのである。

問題の解明には銅板の性質上、彫刻様式と銘文解釈の両面からの考究が必要となる。本論文では、彫刻様式と銘文内容とが一致して指し示す年代を見極めることこそが問題解決の唯一の方法との考えから、いずれにも偏ることのない考察を心がけた。また、研究の進展にともなって派生的に生じた新たな課題も数多くある。それらをまとめるにあたっては以下のよう構成をとった。

第一章 彫刻様式の検討

本章では銅板の彫刻様式から制作年代の設定を試みる。銅板は上段・中段・下段 3 段から構成されており、その全体を取り囲む周縁部分も含めてそれぞれに彫刻が施されている。中央には三層の多宝塔がひときわ大きくあらわされ、塔の初層内には小さいながらも二仏が左右に並んで坐している（二仏並坐）。この図様が『法華経』見宝塔品の一節に基づくことは異論のないところで、本銅板の国宝指定名称「銅板法華説相図」もこれによるものである。

銅板の彫刻様式については早くから一貫してこれを白鳳時代のものとする見方がなされてきた。すなわち、銅板に鑄出された各仏像には童顔短軀と評されるあどけない童児のような表情と寸詰まりの体型がみてとれ、これらは白鳳期の仏像に共通する特徴である。また、銅板上段枠内にみられる中尊を倚坐とし両脇侍を直立合掌像とする三尊形式や、銅板中段にみられる一本の茎から分かれて複数の花をつけた蓮華座にそれぞれ仏菩薩がのる形式も、白鳳期に通有の表現である。

以上は先学によって繰り返して述べられてきたことであるが、私見によれば銅板にはそのほかにも見過ごせない要素がある。その第一は、銅板の多宝塔や仏像の造形には、それぞれ上部から下部にかけて順に、仰ぎ見る視点、正面からの視点、俯瞰的な視点を併用することによる立体表現がみられることである。こうした表現は飛鳥時代の作品にはまったく希薄なもので、初唐の美術様式を学んだ進んだ表現方法といえる。

また、上～中段に多くの仏像を配し、最下縁をマス目状（須弥壇の羽目状）に区切って奏楽天人を並べる形式は、甲午年すなわち持統天皇8年（694）の紀年を有する夏見廃寺および二光寺廃寺出土の埴仏の表現と酷似する。このことは銅板の制作年代を考察するにあたってきわめて重要な要素である。

以上のことから、彫刻様式の検討から導き出される銅板の制作時期は7世紀末から8世紀初頭の白鳳期ということになる。

一方、本章の第三節では、制作年代の問題を離れて、銅板の彫刻にみられる種々の要素からその制作背景について検討を加えた。多宝塔の形式と舍利安置位置、博山にあらわされた文様、あるいは宝珠捧持菩薩像の存在、銘文の欧陽詢風の書風などといった要素は、いずれも本銅板が中国文化をベースにしながらも、強い朝鮮文化の影響下に成ったことを示している。このことは、第四章で詳述するように、銅板の発願者である僧道明が百済系渡来人の末裔・六人部氏の出身であることと大いに関係しよう。白鳳文化が唐文化の多大な影響のもとに形成されたことはいうまでもないが、そこには朝鮮の存在を忘れてはなるまい。唐と百済・新羅といった当時の先進国の文化的影響を的確にとらえてこそ、白鳳文化への理解がよりいっそう深まることになるのである。

第二章 銘文の校訂と解釈

本銅板の銘文の文字は比較的鮮明に刻まれているため、古代の金石文の中では読みやすい部類に属すが、それでもいくつかの文字については研究者間で読みに異同がある。また、欠失部分については、本銘文の述作にあたって引用された複数の典籍が先学によって指摘されており、これによりいくつかの文字を補うことができる。この章では後論に先立って銘文全文を掲げて校訂をはかり、あわせて銘文の通釈を施した。

銅板銘釈読の試みは江戸時代後期の国学者・伴信友（1773～1846）にはじまるといってよく、以降多くの研究者が試行錯誤を重ねてきた。銘文は比較的読みやすく鐫刻されているため、ほとんどの文字については当初より共通の理解がなされてきたが、いくつかの文字に関しては解釈が分かれていた。しかしながら、あらためて銘文の原字を全体にわたって見直すと、従来読みの定まっていなかった文字のなかには同じ銅板銘中に文字の構成要素を共有する別の文字があつて、これと字形を比較し前後の文脈を勘案することによって文字を確定することができる。

本銅板の主としてその制作年代をめぐる研究は、銅板の彫刻様式とともに銘文内容の解釈によって進められてきた経緯があるが、その前提として、正しい字形の把握なくしてはいかなる研究も砂上の楼閣となるおそれを孕んでいる。金石文においては銘文の原字を忠実に読み解く作業がなにごとにも優先するとの考えから、後章で述べる銅板研究の土台とすべく綿密を期した。

一方、銅板銘の文内容であるが、前半部分は『甚希有経』をそのまま引用するなど仏教色が濃い。対して後半部分には道教色が垣間見えるといった傾向がみてとれる。たとえば⑩行目の「遙哉上覺、至矣大仙」（遙かなるかな上覺、至れるかな大仙）の「大仙」、⑫～⑬行目の「調琴練行」（琴を調べて練行す）、「星漢洞照、恒秘瑞巖」（星漢洞〈あき〉らかに照らし、恒に瑞巖に秘し）といった表現がそれである。このことも含めて本銅板銘にはやや難解な箇所もあり、研究者間で異論のある部分も多い。文内容の解釈に関して本章では私見による現代語訳を掲げるにとどめたが、研究の要点となる箇所については後章において適宜詳述していくこととする。

第三章 銘文の検討（一）

第三章と第四章では、銘文内容の検討から銅板の制作年代を考察する。冒頭でも述べたように、銅板の制作年代については銘文中の「歳次降婁」（戊年）をいつとするかをめぐって朱鳥元年（686・丙戌）、文武天皇2年（698・戊戌）、和銅3年（710・庚戌）の3説が有力視されてきたが、近年一部の古代史研究者によって養老6年（722・壬戌）説が強く主張されている。さらには、これにともなって銘文中に三箇所ある天皇をあらわす語句（「天皇陛下」「聖帝」「飛鳥清御原大宮治天下天皇」）がいずれの天皇を指すのかについても説の分かれるところである。

この問題において、銅板銘の「伏惟聖帝超金輪同逸多」は則天武后（則天皇帝）の尊号「慈氏越古金輪聖神皇帝」の意識的な摸倣であるとした福山敏男氏の指摘はなによりも大きな意味をもつ。武後の尊号の摸倣を否定する論者はこれを『仏説弥勒下生成仏経』からの引用と主張するが、同経に使用されている語句から銅板銘の文言を導き出すことは無理で、また単独の語句の問題ではない、有機的な構文としての両者の類似性は銘文が尊号の摸倣によ

ったことを強く示しており、偶然の一致とは考えられない。このことから従来他の理由からも疑問視されてきた朱鳥元年説は成り立ちえないといつてよかろう。

また『日本書紀』持統天皇11年(697)条の「掃灑社寺」の記載から当時持統天皇が病気であったことを導き出した笠原幸雄氏の研究もまたきわめて示唆に富むものといえる。文武2年説は銅板制作の目的を説明できないことが難点であったが、これによって持統の病気平癒という明確な目的が想定できることになった。対して和銅3年説は銅板制作の強い動機が見当たらず、説得性に乏しいことは否めない。

一方、銅板の制作年代に直接関わることではないが、本章では銅板銘の複数の語句の典拠となっている『広弘明集』の伝来の問題についても検討を加えた。結論として、同書を典拠として銘文が編まれた金石文、すなわち本銅板、薬師寺東塔擦銘、那須国造碑の三つが三つとも文武朝の撰文にかかることから、その舶載年代は文武朝とするのがもっとも妥当と考える。

第四章 銘文の検討(二)

本章の第一節と第二節では日本古代史研究者との対論を通じて得られた知見をもとに天皇の呼称について考察を試みた。飛鳥浄御原宮というまでもなく天武天皇の宮であり、その宮号を冠する「飛鳥浄(清)御原(大)宮治天下天皇」という呼び名は天武を指すとするのが従来の大方の理解であった。そのことから銅板もまた天武朝に成ったとする論者も少なからずいる。しかし、天武の崩御後この宮で即位し、この宮にあった持統天皇もまた右の呼び名であらわされることがあり、現存する史料や金石文のなかだけでも多くの用例を数えることができる。

また、銅板銘にも使用されている「天皇陛下」の語については、これを過去の天皇には用いず、現在の天皇のみを指すとする考え方が根強くあるが、先学の研究に導かれながらいくつかの史料をつぶさに検討した結果、それが過去か現在かは文脈によって決定されるもので、この語にそうした意味合いがあるかどうかは断定できないとの結論に達した。また「聖帝」の語についてはこれとは逆に過去の天皇を指すと主張する論者もいるが、この語自体にそうした意味はないと判断するに至った。

次に、それらのことからさらに考察を進めた結果、複数ある持統天皇の呼称には、時期に応じてある傾向が見いだせることがわかった。つまり、①持統が飛鳥浄御原宮に在った時期には飛鳥浄御原宮の宮号を冠した呼び方のみがおこなわれ、②藤原遷都後の一時期(讓位・崩御後を含む)においては状況に応じて飛鳥浄御原宮の宮号を冠した呼び名と藤原宮の宮号を冠した呼び名の両方が使い分けられたが、③慶雲四年(707)の文武崩御を境として、その呼称は藤原宮の宮号を冠するものに統一されていったのである。従来こうした持統の段階的な呼び名の変化を指摘した研究はなかったが、このことは持統が飛鳥浄御原宮においては

天武と、藤原宮においては文武と、宮を共有した特殊な天皇であったがために、表記上これを他の天皇（天武・文武）と区別するための当然の工夫といえる。銅板は文武天皇2年（698）すなわち右の②の期間に制作されたため、藤原遷都後であるにもかかわらず持続を「飛鳥清御原大宮治天下天皇」と表記しているのである。

第三節と第四節では、銅板に発願者としてその名が刻まれている「道明」と「豊山」の語について考察した。「道明」については後世に成った長谷寺の縁起類を除けば関係史料がきわめて乏しく、研究上の難点の一つとなってきたが、銅板の研究を進める過程で私は、大仏開眼会の参加者を列記した「正倉院塵芥文書 雑張第一冊」の一片に、これと同じ僧名を発見することができた。これが銅板の「道明」かどうかの断定はできないものの、当時の僧の卒年、長谷寺の縁起類の内容などと照らした場合、矛盾する結果は得られず、その蓋然性は高いと考える。また、そうした場合には「道明」の活動時期の推定から、研究史の当初から有力説の一つであった銅板の朱鳥元年（686）制作説はますます成り立ちがたいことになる。

また「豊山」の語は、今日長谷寺の代名詞ともなっているため、銘文にこの語が使用されている銅板は養老・神亀頃（717～729）の長谷寺創建以前には成立しえないとする主張もなされてきたが、そうした主張は「豊山」の語の古代における意味と近現代における意味とを取り違えたことによる誤りである。この語が古くは長谷寺そのものを意味せず、初瀬の地を中心とする広い地域を指すものであったとする遠日出典氏の卓説により、銅板は長谷寺創建後につくられたとする養老6年（722）説は根拠を失った。さらに「豊山」の語が道教で都の東北方にある霊地とされる「羅酆山」との表記上、意味上、地理上の類似から造作されたとする私見によれば、銅板の制作時期は「豊山」すなわち初瀬山・巻向山などの山々が宮の東北方にあたる時期、すなわち飛鳥浄御原宮時代から藤原宮時代がふさわしく、このことによってもやはり養老六年説は認められないことになるのである。

第五章 長谷寺史と銅板

長谷寺は奈良県桜井市初瀬（はせ）にある古刹である。真言宗豊山派の総本山として、また西国三十三所観音霊場の第八番札所としても著名なこの寺は、初瀬川の溪流を見下ろす初瀬山の中腹に、本尊十一面観音の巨像を安置する舞台造（懸造）の本堂（大悲閣）と、これを中心とした大伽藍を構えている。本章の第一節から第三節では長谷寺創建問題の研究史を整理し、先学による縁起研究の成果を踏まえることにより、長谷寺史において銅板の果たした役割を考察する。

長谷寺の創建については他の寺院とは異なる、やや錯綜した経緯をもって語られることが多く、それはまた必ずしも史実を反映したものとはいえない。なぜなら今日一般に理解されている長谷寺草創観は後代に成立した縁起類の記載をそのまま認めることによって生じたもので、さらにその縁起類は、長谷寺成立以前に制作され同寺の創建とは何ら関係のない銅板

の銘を利用（ないしは誤読）することによって構成されたものだからである。

つまり、長谷寺の創建は一般に「本」と「後」に区別して説明されることが多いが、達日出典氏による縁起研究によれば史実とは異なることが指摘されている。同氏によれば 10 世紀以降に成った長谷寺の複数の縁起は、長谷寺の創建を「本」と「後」に分ける「新縁起の系統」と、その区別をつけない「古縁起の系統」とに分類できるという。前者はじっさいには銅板そのものの造立を意味する銅板銘の「敬造千佛多寶佛塔」を実際の建造物と読みかえることで長谷寺の創建を天武朝にまで溯らせようとする内容をもつものに対して、後者こそが史実に近い内容というのである。

銅板の制作は白鳳期であり、養老・神亀頃とされる長谷寺の創建以前のことであるから、当然のことながら銅板に長谷寺の創建事情が語られているはずはないが、こうした縁起が生み出されていった背景には長谷寺内における銅板のいわば「再発見」があり、現代に伝わる縁起は銅板を利用することによって形成されたものであることになる。

以上を踏まえて、本章の第四節では、美術史研究における難題の一つである長谷寺本尊十一面観音像の像容の問題を取り上げる。この像はその独特の形姿から「長谷寺式十一面観音像」と呼ばれ、その右手に錫杖を執る姿については、従来「観音と地蔵の合体」などとする素朴な解釈を別として本格的にこれを論ずる研究はなされてこなかった。また、錫杖を執るに至った時期についても、従来はさしたる根拠もなく漠然と創建本尊からとみなされてきたのみで、やはりほとんど論じられることがなかった。

しかしながら、私見によれば、「古縁起の系統」と「新縁起の系統」の縁起が切り替わる時期は十一面観音像が手に錫杖を持たされた時期と重なるのである。すなわち、10 世紀以降の律令制の解体に際して国家による経済的保障が失われ、一般民衆の支持を集めざるを得ない状況にあった長谷寺において、その再建を担った行仁上人は、一方では銅板の「再発見」によって長谷寺を天武天皇の創建寺院とする「新縁起」をつくり、さらには勸進僧としての自らの立場を銅板銘の道明と重ね合わせ、また錫を負って布教に努める自身の姿を本尊十一面観音像に仮託することで本尊十一面観音像の像容改変に踏み切ったのである。このことによって同像は靈驗仏としての地位を確立し、長谷寺は危機をみごとに乗り切ることとなったのである。

銅板はけっして長谷寺の創建を語るものではないが、以上のような考察を通じて私は銅板の長谷寺史に果たした役割のまことに多大なることを改めて強く感じるのである。

第六章 銅板の原所在地について

前章までの考察により述べてきたように銅板は文武天皇 2 年（698）に持統太上天皇の病氣平癒を目的として僧道明によって制作されたものと考えられる。一方、長谷寺の創建を天武朝とする古くからの考え方は認められず、その創建は養老・神亀年間（717～729）頃のこと

とみなされる。したがって銅板は長谷寺の創建以前にいずれかの場所で制作、安置され、後年になって寺内に移安されたと考えざるをえない。そうしたとき、当然のことながら銅板の最初の所在地はいったいどこなのか、なぜその地に安置されたのか、また長谷寺への移安時期はいつなのかといった新たな問題が出来る。

ところが、この問題を解き明かすに十分な、信の置ける史料はきわめて乏しく、手がかりとして、わずかに『日本書紀』天武天皇8年(679)条に同天皇が宴を設けた地として記される「迹驚淵(とどろきのふち)」を銅板の原所在地とする伝承があるにすぎない。近年、永井義憲・東野治之・達日出典の各氏はその地を現桜井市大字白河字北山にある通称「霏山(りょうさん)の池」に比定し、これを銅板の原所在地として積極的に認める論考を発表されており、私もまた平成21年(2009)11月にその地への踏査をおこなった。本章では私の実地踏査と関連する諸文献の検討から銅板の原所在地の蓋然性について論じ、あわせて銅板が長谷寺内に持ち込まれた時期と寺内におけるその後の移動についても検討を加えた。

その結果、銅板の元の所在地が『日本書紀』の「迹驚淵」である可能性は高いといえるものの、この「迹驚淵」が先学らの認める現桜井市大字白河の「霏山の池」であることの確証は得られなかった。ただし私が銅板の原所在地を「霏山の池」と認め切れなかった唯一の疑点は『日本輿地通志畿内部』(五畿内志)の「秉田神社」項にある「在_二白川村轟_一滝_一上_二」の記述であり、今後この疑点が何らかの理由によって払拭されることがあれば、現時点での私見に変更の必要が生じることもありえよう。

一方、銅板の原所在地が「迹驚淵」であるから銅板は天武朝につくられたとする従来説については、「迹驚淵」は持統にとってゆかりの地であり、右のことを理由に銅板の制作を天武朝とする所説が認められないことを明らかにした。とくに『日本書紀』の持統天皇4年(690)5月の吉野行幸に続く6月の泊瀬行幸を「迹驚淵」および銅板と関連づける見方はこれまでにはなかった視点であるが、この行幸で持統が「迹驚淵」を訪れた可能性はきわめて高いと思われる。

結 語

以上のように、銅板の彫刻と銘文および周辺の文献史料と美術史料を多角的に考察した結果、本銅板は持統天皇の病氣平癒のために同天皇の11年(697)に発願がなされ、翌文武天皇2年(698)七月上旬に完成したものとする。これが本論文の最終的な結論である。

以 上